

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 31 日現在

機関番号：17401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26770053

研究課題名(和文) 武家社会における「画鷹」の受容と展開

研究課題名(英文) Acceptance and Development of Hawk Drawings in the Warrior Society

研究代表者

水野 裕史 (MIZUNO, Yuji)

熊本大学・教育学部・講師

研究者番号：50617024

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、武家社会における「画鷹」成立と展開の文化的背景を明らかにすることにある。その具体的な方法として、画鷹の悉皆調査と文献史料の集積を主な目的とした。

調査としては、国内外の16の博物館や美術館などで実見調査を実施し、画鷹の体系化を試みた。加えて五山文学や武家、公家の日記などから数百件の画鷹の記事を抽出した。

研究の結果、武家以外にも、公家である西園寺家や勧修寺家が画鷹の流行に深く関与していることが明らかとなった。本研究は「武家社会」をキーワードとしたものだが、異なる視点から画鷹受容の文化的背景の一端を解明することができた点の一つの成果と考える。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to elucidate the cultural background of the establishment and development of Hawk Drawings in the samurai society. As a concrete method, the main purpose was to investigate Hawk Drawings and accumulate historical documents.

I made a detailed inquiry at 16 museums in Japan and overseas. Also, I extracted a lot of information of paintings from Gozan literature and samurai's diary etc.

As a result of the research, in addition to the samurai, I also revealed that the Saionji family and the Kajyuji family, who are the court nobles, are deeply involved in the epidemic of Hawk Drawings.

Although this research keyword was "samurai society", it was an important result that I could elucidate a few aspects of the cultural background for acceptance of Hawk Drawings from diverse points of view.

研究分野：日本絵画史

キーワード：鷹図 鷹狩図 秀吉「大鷹野」 勧修寺家 細川重賢

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 画鷹の作例と制作者・受容者

鷹は古代より源氏絵や地獄絵などに画面構成の一部として描かれてきた。単独で鷹が描かれるようになったのは、中世末期に中国より舶載された「鷹図」が発端と考えられる(拙稿「戦国時代における鷹図の画と詩」『藝叢』24号、2008年)。中世の画鷹の現存作例では30点以上が確認できるが、その中には職業画家ではなく美濃の土岐氏などの武人画家と呼ばれる絵師たちの制作が多数あった点が特筆される。また近世では博物的志向もあり尾張徳川家や肥後細川家などの大名自身が画鷹を手がけ、また北宋の皇帝徽宗筆と伝えられる画鷹が大家で珍重されたことで知られる。つまり「鷹」という主題が武家社会において何らかの特別な意味を持ち、受容されていたことが示唆できるのである。

### (2) 先行研究の成果

近年、鷹を主題とした絵画研究が充実し、新たな作例が頻出している。稲畑ルミ子氏(「曾我直庵筆鷹図屏風」『国華』1399号、2012年)や知念理氏(「田村直翁筆「架鷹図押絵貼屏風」(大阪市立美術館蔵)について」『大阪市立美術館紀要』13号、2013年)などの論考があり、貴重な作品研究として位置づけることができる。しかし、日本の鷹図に関する体系的な報告は少なく、むしろ諸外国でその一端が報告されているのである(Rachel Saunders, *Pursuits of Power: Falconry in Edo Period Japan, Orientations*, 35th, 2007)。さらに中国の鷹図では、体系的な研究が進んでいることも特筆すべき点であろう(Hou-Mei SOUG, *Decoded Messages*, Yale University Press, 2009)。そのため中国の画鷹との比較を通じて、日本における画鷹の体系的・総合的研究が必要と言える。

先行研究では、画鷹が流行した背景として鷹狩の流行が指摘されてきた。しかし鷹狩の研究によれば画鷹が流行した中世末期は、その様相が明らかではなく、近衛前久や織田信長といった特定の身分階層でのみ行われたとされ、鷹狩という根拠のみで画鷹が流行したとするには合理的に説明できなかった。

そこで、本研究は、先行研究を踏まえつつ、画鷹の体系化を試みるとともに、画鷹制作における鷹狩の関係性について再検討する

こととしたのである。

### (3) 自身のこれまでの研究

これまでの研究から画鷹が社会に流通し始めた頃の成立状況や個別の制作状況については判明しつつある。しかし、注文・制作・流通・鑑賞・贈答といった画鷹に関わる活動全てになぜ武家自身が関わっていたのかという課題が残る。仮に博物的志向から画鷹を描いたとすれば、多くの動物がいるにも関わらず、なぜ「鷹」である必要があったのか。そこには武家による視覚的イメージに訴えた戦略があったものと考えられる。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、武家社会において鷹が描かれた絵画である「画鷹」がどのような機能と意図で受容され、どのように展開していったのかを明らかにすることにある。研究に当たっては絵画作例だけではなく武家や絵師、禅僧、儒者の記録、放鷹の有職故実『鷹書』など、多様な文献資料から画鷹の記事を収集蓄積し、実証的に解明することを目指す。

武家は、受容者としてだけでなく、制作者としても画鷹に関わっていた。そのため本研究は武家の視点に立ち、画鷹の注文主や制作者の立場、流通・鑑賞・贈答の場など個別の状況を復元することから研究を始める。その上で、それらの比較的・総合的研究によって武家社会における「画鷹」の受容と展開の全体像を追求し、画鷹の注文・制作・流通・鑑賞・贈答といった一連の制作鑑賞システムの解明を目指す。

## 3. 研究の方法

本研究は、以下の3点を主軸としながら、遂行する。

### (1) 絵画作例の悉皆調査

鷹が描かれた絵画資料については、中世末期以降の作例が多く確認されるものの、これまで体系化はされてこなかった。そのため悉皆調査を本研究課題の最重要課題と位置づけ、実施する。作品分析および分類にあたっては、鷹の羽毛表現など共通の図様を分類することで種の同定を検討し、先行作例からの図様の転用などについて考究する。

### (2) 鷹狩との関連性

これまで 17 世紀における画鷹の流行については、感覚的に武家の鷹狩流行があると指摘されてきた。鷹狩流行という背景を鑑みると、風俗画の一面題である「鷹狩図」が画鷹成立および流行に何らかに影響を与えた可能性が高い。そのため、画鷹と合わせて、鷹狩図の調査も平行しておこなうことで、相互の関係性を明らかにする。

### (3) 文献史料の調査

武家や絵師、禅僧、儒者の記録、鷹狩の故実書である絵入りの『鷹書』などの文献資料から画鷹の記事を抽出する。その上で分析し、画鷹がどのように用いられてきたのかを追求する。具体的には、画鷹の制作、鑑賞情報を得るために、日記、古記録等の文献資料を博捜し、そこに記載された本文を整理する。作品調査と同様に、画鷹のみならず鷹狩図などの鷹が描かれた絵画も対象と、文献史料の集積を目指す。

## 4. 研究成果

本研究の目的は、武家社会における「画鷹」成立と展開の文化的背景を明らかにすることにある。その観点から以下の成果を得た。

### (1) 画鷹の体系化と個別作例の調査

画鷹は、中世末期以降の作例が数多く確認されるものの、十分に体系化されてきていない。そのため悉皆調査を本研究課題の第一義とし、実施した。中世の作例に限定したものの体系化を試み、中国の画鷹との比較を通じて、日本の画鷹の特質を考察し、成果の一部を『鷹・鷹場・環境研究』1号（鷹・鷹場・環境研究会、2017年）にて公開した。

個別の作例については、国内外の16の博物館や美術館等にて、29点の実見調査を実施した。

成果の一例をあげれば、フィラデルフィア美術館所蔵の《鷹図屏風》の武家との関連性について検討をおこなった。本図には、オオタカやハイタカ、クマタカなどの数種類の鷹が描かれている。複数の種が描かれたということは、鷹自体に対する愛好があるものと仮説立て、検討をおこなった。本図は、中世末期の作例であるが、時代が下る近世初期の文献から武家が複数種の鷹を所有し、愛玩していたことから、本図には武家による鷹愛好が文化的背景としてあると解釈したのである。

### (2) 大名家における画鷹の贈答儀礼

かつて中世の大名家における画鷹の贈答儀礼については、宛先の大名に英雄としての敬意を示すため、贈答があったことを指摘したことがある（拙稿「戦国時代における鷹図の画と詩」『藝叢』24号、2008年）。本研究では、近世の武家を考察対象とし、検討をおこなった。その具体的な大名として、良質な文献史料が残る熊本藩7代藩主の細川重賢（1721-1785）を事例に、彼の日記や事績、関与したと考えられる絵画を分析した。公刊されている『重賢公日記』や『銀臺遺事』、「重賢公御代御代筆控」（永青文庫蔵）といった史料から、鷹狩に使用する鷹や鷹狩の際の獲物であった禽獣を絵師に写させたことを認めた。さらには山内家などの大名家との交遊を通じて、交換し合っていたことを明らかにした。その背景には、大名の博物趣味には留まらない、鷹狩愛好があるものと考えた。例えば、重賢は生涯にわたり千回以上の鷹狩をおこなったことが日記から判明している。しかも、鷹を「梅一」や「角館」と命名し、愛玩し、写していたことも判る。つまり、18世紀の武家たちが画鷹を贈答していた背景には、博物趣味とともに、鷹狩愛好があったものと明確に結論づけられるのである。

### (3) 鷹狩との関連性

先行研究では、近世期における画鷹の流行について、感覚的に武家の鷹狩愛好があると指摘されてきた。しかし、鷹狩とは本来公家の文化である。そこで公家が関与していたという仮説をたてて、検証したところ、勧修寺家はその流行に関与していた可能性を見出した。17世紀後半において勧修寺家は、鷹狩絵巻を狩野永納に発注している。それは天正19年（1591）に尾張や美濃で豊臣秀吉がおこなった「大鷹野」を主題とした絵巻であった。徳川政権下において秀吉追慕の美術品を制作することは厳しいものの、制作背景として京の公家文化圏に限定して17世紀後半における秀吉イメージの復興があったという見解を得た。おそらく17世紀後半以降における画鷹や鷹狩図の流行の背景には、秀吉「大鷹野」のイメージが投影されたものと考えたのである。その成果の一部は『デアルテ』33号（九州藝術学会、2017年）に投稿し、公開した。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 4 件)

- ①水野裕史「狩野永納筆《秀吉鷹狩絵巻》下絵と勸修寺家」『デアルテ』33号、2017年、印刷中、査読有
- ②水野裕史「日本における鷹図・鷹狩図の研究概要と展望—中国の鷹図を踏まえて—」『鷹・鷹場・環境研究』1号、2017年、43-56頁、査読無  
<http://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/ja/recordID/1807788?hit=4&caller=xc-search>
- ③水野裕史「庭を構成する自然物の意味と機能」『中世庭園の研究—鎌倉・室町時代—』独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所、2016年、163-171頁、査読無
- ④水野裕史「宮内庁書陵部蔵「鷹狩図」と復古大和絵」『熊本大学教育学部紀要』63号、2014年、257-265頁、査読無

[学会発表] (計 7 件)

- ①水野裕史、博物大名・重賢の眼差し〜武将と鷹の意外な関係〜、里山ギャラリーセミナー永青文庫、肥後の里山ギャラリー（熊本県熊本市）、2017年4月8日（招待講演）
- ②水野裕史、花鳥画への眼差し—吉祥図案と博物趣味の境界—、第7回「自然観」研究会、滋賀県立琵琶湖博物館（滋賀県草津市）、2016年9月3日
- ③水野裕史、鷹の絵に込められた武将の精神、宇部古文書研究会五周年記念講演会、宇部市文化会館（山口県宇部市）、2016年5月14日（招待講演）
- ④水野裕史、秀吉「大鷹野」と鷹狩図、熊本中世史研究会、熊本大学（熊本県熊本市）、2016年1月23日
- ⑤水野裕史、個人蔵《春日若宮祭礼図・鷹狩図屏風》の主題と典拠、第68回美術史学会全国大会、岡山大学（岡山県岡山市）、2015年5月24日
- ⑥水野裕史、桃山時代を中心とした障屏画の意図するもの、熊本県高等学校教育研究会美術・工芸部会研究協議会（熊本県八代市）、2015年11月20日（招待講演）
- ⑦水野裕史、鷹狩図の流行をめぐる—考察、第91回九州藝術学会、つなぎ文化センター（熊本県津奈木町）、2014年11月29日

[その他] (計 1 件)

解説

- ①水野裕史「鳥好きな殿様と江戸時代の博物趣味—《游禽図》・《群禽之図》—」『総合文化誌KUMAMOTO』18号、NPO法人くまもと文化振興会、2017年、161-164頁

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

水野 裕史 (MIZUNO, Yuji)  
熊本大学・教育学部・講師  
研究者番号：50617024